

《書評》

小林延人著 『明治維新期の貨幣経済』

東京大学出版会、2015年3月、340頁

荒武 賢一郎*

KOBAYASHI Noburu, *The Development of a Monetary Economy in Early Meiji Japan*, University of Tokyo Press, 2015

ARATAKE Kenichiro

現代に生きる私たちは、ごく当たり前「お金」を使い、日々の暮らしを過ごしている。日本であれば一円玉から一万円札まで、海外においてもそれぞれの通貨を利用し、初めて入った店や人と「交換」するし、最近では電子マネーを何気なく支払い手段とすることもある。しかしながら、歴史を振り返ってみた場合、貨幣の発行や制度の変化、社会全体の傾向を史料から読み取ることではできても、実際に人々はどの通貨を使用していたのか、さらにはなぜ交換ができたのか(=価値を信用していたのか)、といった基本的な検証をすることは案外難しい。誰しものが身近な存在と思い、とても関心を持っている「お金の歴史」について、本書は明治維新期の日本を舞台に貨幣流通の実態解明をおこない、改めてその重要性を教えてくれる好著といえるだろう。

まずは、本書の構成を紹介しておきたい。

- 序章 明治維新时期における経済発展の展望
- 第一章 大坂両替商の大名貸と藩債処分
- 第二章 高知の銀券発行と銀目廃止
- 第三章 太政官札の流通経路と地域間決済通貨
- 第四章 日田の紙幣流通と掛屋
- 第五章 上田の地域通貨流通と贖金
- 第六章 名古屋の通商政策と地域通貨
- 第七章 西播の他領藩札流入と国産会所
- 第八章 群馬・埼玉の藩札買上政策と藩札回収

*東北大学東北アジア研究センター准教授

終章 貨幣体系の変容に応じた実体経済の再編

章題だけを見ても諸地域を取り上げようという意欲的な姿勢を看取できるが、後述するように貨幣をめぐる両替商、藩、明治政府といった「プレイヤー」たちの動きや、貨幣流通の実態に鋭く迫った意義は大きい。

二

日本のみならず、貨幣・通貨の歴史研究には多くの専門家が分析を加え、その体系・構造・組織形成、そして何よりも知りたい実態について議論を重ねてきた。著者はそのなかで日本の近世から近代へと劇的に転換を遂げる過程、すなわち明治維新期に焦点を絞り、当時の政策的展開とともに利用形態とその担い手たちを詳細に検討した。序章の冒頭で本書の位置づけを「ささやかな試み」と記しているが、読了してみると貨幣経済にとどまらない「明治維新史」への新しい一手を打ったのではないかと感じる。

その序章では、貨幣体系の構造的変容を最初に取り上げ、近世日本の「三貨制度」から我々にも馴染み深い近代的な統一貨幣制度（「円」）への背景を整理する。これを端的に日本史の教科書的な説明では、「両から円へ」という言葉でわかりやすく表現し、1971年（明治4）5月10日に明治政府が制定した「新貨条例」によって江戸時代とは異なる新しい貨幣が登場したと理解される。しかしながら、実態としては新貨幣の発行がすぐさま社会で受容されたわけではなく、非常に複雑な通貨の発行とその利用がもたらされ、著者の言葉を借りれば明治維新期は「貨幣の多様性が極地に達した時期」（6頁）だった。本書において第一の課題として挙げる「維新期にどのような貨幣制度ないし貨幣体系が成立したか」という疑問はそのような背景から生まれているのである。この課題設定は制度のみならず、当時通貨を利用していた人々のありようと、実際に使われる貨幣の組み合わせに着目している点が重要であろう。これと関わって、明治維新期の日本経済は停滞していたという通説のとらえ直しに向き合う著者の視角も新鮮に映る。その視角とは幕末期から続く「持続的成長（発展）」を意識し、これまでの研究史整理から、新たな問題点として、①三都（江戸・京都・大坂）の信用取引を検討するだけで当時の日本経済を評価して良いのか、②さまざまな障壁を乗り越える商人たちの実像が明らかではない、という2点に集約している。加えて、明治初年に打ち出される経済政策や廃藩置県などの国家的転換にも着目し、その変容に応じて実体経済はどのような動きを示したのかを主題に据えている点も示唆深い。右のような指針から、以下の各論が叙述されていく。

第一章では、大坂の両替商・銭屋佐兵衛家を事例に、中規模と位置づけられる商家において大名貸（だいまようがし、近世の大家名＜藩＞に資金を貸し付けること）と藩債処分（廃藩置県に際し、旧藩が抱えていた膨大な借財を処理する必要がある、明治政府によって全体の約8割が切り捨てられたともいわれる）がどのように影響したのかを論じる。この大名貸と藩債処分が、①貸主にあたる両替商たちの経営を揺るがせた、②その反対に大名貸は利息収入だけで利益の出る安

全な貸付方法、などという諸説に対し、ここでは個別の実証を銭屋佐兵衛家の経営文書からおこなっている。大名貸を手掛けた大坂商人でも後発とされる同家について、近世後期から大名家などさまざまな領主への貸付高と累積純利益を詳しく分析した。結果として導き出されるのは、幕末維新期を経た 1872 年(明治 5)に貸付残高が累積純利益をわずかに上回る程度でほとんど元が取れる状態になっていたことである。このような具体的な数値化と、大名相手の金融業が両替商にとってどのような存在だったのかを詳しく考察した例は極めて少なく、本書の大きな成果のひとつに挙げられよう。

第二章では、銭屋佐兵衛家の史料に依拠して、銀目廃止と貸付先のひとつであった高知藩の銀券発行問題を考察している。銀目廃止令とは、1868 年(慶応 4)5 月に新政府が出した布告であり、江戸幕府「三貨制度(金・銀・銭)」のひとつである正銀の通用停止と、銀建ての貸借禁止を命じたもので、これによって京都や大坂の両替商は大きな打撃を受け、閉店や破産に追い込まれたといわれてきた。近年、その学説に否定的な見解が登場(石井寛治『経済発展と両替商金融』有斐閣、2007 年)しているが、著者は銀目廃止とは何だったのかという根本的な問いかけが不十分とみて、その実態・影響を大坂両替商と高知藩の関係から解き明かそうとする。ここでの読みどころは、銀目廃止によって政府発行貨幣の太政官札が流通することが促された一方で、両替商たちのなかには巧みにこの危機を回避した事例があったことを論証している。また、高知藩の特産品である砂糖取引と、それに関わる銀券(藩札)発行によって、銭屋佐兵衛と旧大名家が大きな局面を乗り越えようとする点が詳細に述べられている。本章の成果として興味深いのは、新しい政治・経済の枠組みに対して、両替商や藩に限られた選択肢を発見する様子、さらには両者間の交渉過程から得られていく「答え」がみえてくることであろう。

明治初年の貨幣流通において、大きな論点になるのは政府が発行する太政官札の存在である。そもそも貨幣とは、発行主体の信用力、裏付けとなる素材価値、社会に行き渡る膨大な発行量が流通の基本条件となってくるが、初発段階の太政官札はその資質を伴っておらず、また高額紙幣であったため日用取引に不便をきたしていた。いわば「人気のない貨幣」というのは通説でも主張されてきたが、第三章ではこの不流通な太政官札を誰が、どのような場面で使っていたのかを検証する。これは著者が序章で示した維新时期経済停滞論の克服ともつながっており、高額紙幣である太政官札が否応なく経済的中心地の三都に滞留したという定説への挑戦でもある。その大きな意義は、日常的な小額取引には不向きな太政官札が、遠隔地間取引においては「地域間決済通貨」の役割を果たし、それを利用する商人たちは持ち運びに便利な高額紙幣を積極的に使ったのではないかという仮説を打ち立てたところであろう。また、これは民間社会の流通に限らず、政府内部および大手両替商が政府から受領する経路を明らかにして、「経済発展」に寄与していたという流れで理解されている。

第四章から第八章は扱う主題は異なるものの、豊後国日田・信濃国上田・名古屋・播磨国西部・群馬および埼玉の事例を検出し、それぞれの地域的特質と通貨のあり方を丹念に追究している。いずれも著者が自ら博捜して知り得た貴重な史料を分析する一方、各地の郷土史家や自治体史が

積み上げてきた史実もうまく融合させた点が評価できよう。地域史研究の秀逸な成果を「日本史」に含めていこうとする観点からも重要な作業だったと感じる。第四章では、近世後期に幕府の直轄地であり、九州地方の金融の中心地だった豊後国日田地域における地域通貨の流通を検討している。この日田には近隣の大名領からいろいろな種類の藩札が流入し、それぞれには相場価格が付けられていた。現代の私たちからすれば、多くの貨幣が存在することにどのような意味があるのか、と愚問を投げかけたくなるが、当該地域の人々はこれらを巧みに操作し、安定的な貨幣流通が展開していたのである。とりわけ著者が重視するのは、掛屋と呼ばれる商人資本がこの体制の維持に果たした役割である。本書が素材とした千原家など日田の掛屋は大名貸を手掛けつつ、貢租収納や他地域との金融関係を切り結び、たくさんの領主が錯綜する「非領国」地域における貨幣の選良を成立させた。日田の金融に関する研究は、これまでも幾多の専門家が取り組んできたが、著者が改めて諸研究の整理と史料の実証を進めたことで、維新期の貨幣経済と地域経済の実像を重ね合わせたように見受けられる。

この「非領国」地域の分析手法は、第五章の信濃国上田藩における贖金(にせがね・がんきん)と地域通貨の研究にも適用されている。上田および近隣地域の特徴としては、幕末維新期の開港に伴い、蚕種製造が大きな産業の柱であったことが挙げられ、贖金の流入によって農民騒擾が惹起したとする明治初年の状況を、貨幣の仕組みを中心に明らかにした。先行研究が縷々述べてきたように明治政府の幣制改革や、とりわけ甚だしい贖金の流入から、貨幣に対する不信感と、現状を是としない農民の反発が正しい歴史的な理解とされてきた。しかし、著者が貨幣の実態把握をおこなったことで、「貨幣経済自体は混乱していたわけではない」ことが明らかになった。太政官札は高額貨幣流通を担い、地域通貨が中額および小額の需要を吸収し、それぞれの貨幣が社会においてうまく機能したことが極めて重要だろう。また、上田における地域通貨には信濃全国札と上田藩札が並立するが、これも前者は地域間決済、後者は贖金との交換を目的に受け入れられたとする。この貨幣の運営によって地域の経済活動が継続できたとする結論は、「貨幣経済が地域社会の重要な基盤であること」を裏付けているものと推察できよう。

地域通貨が当該期の経済に極めて大きな存在であったことは、尾張徳川家の拠点・名古屋でも実証できるようなのである。第六章は、その名古屋における通商政策と、地域経済を牽引する商人たちを連動させて、維新期の経済的特質を再考した。ここでは明治政府が推進した通商司政策を取り上げ、名古屋通商会社の独自性について考察を繰り返している。そのなかでも、地域通貨の引受主体が幕末から維新期を通じて「御用達商人」という有力な商人資本であり、彼らが地域的利害を調整しながら中央政府からの自立性を担保した経緯を知ることができた。

藩札の存在意義に焦点をあてる著者は、第七章の西播(播磨国西部)における事例で、他領藩札の流入と、貨幣流通と特産物取引の相互性を持つ国産会所方式に論点を移していく。ひとつの地域で各種の藩札が複雑に流通することは、その相場の差額を利用して利鞘を稼ごうとする「姦商」を横行させる結果を招く。そこで当地に拠点を持つ諸藩は協定を組み、相場を建てずにさまざまな藩札を自由に通用させる方策を出した。これは一時的な対応であるが、領主・行政側にとって

も、民間社会においても、危機を乗り切る施策であり、他領藩札の流入は社会にとって悪影響であったという定説へ一石を投じる実証だといえる。

第八章は、検討する地域を北関東として、いかにして市中に流通する藩札を吸い上げるのかという具体的事例を紹介する。明治政府は広範に市場へ投下されてきた各種の藩札を回収することに力を注いだ。廃藩置県の後には回収主体を県として、そこから大蔵省に上納させることになっていた。市中に拡散している多量の藩札をどのように集めていくのか。これには二つの方法があると著者は指摘する。第一には藩札を政府発行の新紙幣と等価交換する、第二は交換ではなく藩札を買い上げる、とするものだった。交換と買上の判断基準はどこにあるのかといえ、対象となる藩札の市中相場ではないかとする。ここで興味深いのは、群馬県に引き継がれていく高崎藩札・前橋藩札の買上をめぐる動きである。著者の検出する未発行の藩札が予期せず市場に流出したという一件はもとより、実際の回収をおこなう群馬県と大蔵省の交渉過程は、当時の政策遂行を確認するうえでも重要である。全面的にはなくとも、買上について群馬県の上申を聞き入れざるを得ない大蔵省の対応は、ほかの地域の事例と突き合わせると、新たな論点が生まれるだろう。また、埼玉県の忍藩札の買上では藩札回収よりも、むしろ地域における藩札需要を再び呼び起こす状況を招いたことが明らかになった点も示唆深い。

三

読了したあとの感想は、「大変おもしろかった」という一言に尽きる。ある著名な経済史研究者は、「幕末維新期の金融はややこしいから手が付けられない」と評者に語ったことがある。また、「貨幣史研究は難しい」という理解は多くの歴史研究者が共有する意識でもあろう。その難題に、持ち前の探究心と緻密な論理展開を兼ね備えて挑んだのが著者であり、本書はその第一歩として大きな収穫を得た。

右に示した容易ではない貨幣史研究の本源には、文書で多くが語られないところにあると評者は考えている。人々が日常で当然の如く利用する通貨は、特別な事案でない限り、事細かに記録されることもなく、誰に渡ったかも書類上には出てこない。そのため、政府が発信する通達や法令、制度改変を伝える公文書の存在が極めて重要になってくる。ただし、本書が示してくれたように制度がすべて物語ることは難しい。近年の貨幣史研究はそのみえない通用の実像を、社会的背景や慣習を梃子に「人と金が絡み合う歴史」として詳しく論じられている。著者もその研究姿勢を共有し、幕末維新期の貨幣史に果敢に切り込んだのであろうと推察する。

歴史書を読んで興味深いと感じるのは、実証と論理展開の明快さであろうと個人的には思う。この両輪によってこそ、好著が生まれ、新たな研究の展開が期待できる。本書もその条件を悠々と満たし、今後の貨幣史研究には欠かせない成果物になったといえよう。とりわけ、日本史研究者なら誰もが知りたい幕末維新期の貨幣問題には多くの先学が取り組み、膨大な研究蓄積がある。また、著者が多数引用した各地の秀逸な参考文献も存在し、これらを統合するだけでも多くの時

間を要したことだろう。ただし、その作業があつてこそ、著者が「発見した」大きな課題を私たちは知ることになる。それは、著者が指摘する維新期貨幣制度の成立、近世・近代移行期における経済停滞論の克服、実体経済の質的転換などの大きな命題であつた。そこから、大名貸や藩債処分両替商に対する影響や、地域のなかで流通する地域通貨、隔地間取引で利用された太政官札、そして統一を目的とした貨幣の変容、といった個別の論点が提示されたのである。

さきに「人と金が絡み合う歴史」と述べたが、著者が置く力点は「貨幣を扱う人々の意識」であり、それを詳しく検討するために駆使されたのは商家の経営史料である。叙述のなかでは時折、個別商家の事例であると付されているが、銭屋佐兵衛家を分析した第一章および第二章の成果は極めて重要だと考えられる。大坂両替商の経営を子細に析出することはなかなか困難であり、中川すがね氏が指摘するように、中規模および小規模の家経営についてまとめた事例はそれほど多くないだろう（中川すがね『大坂両替商の金融と社会』清文堂出版、2003年）。このような具体的実証をなくして、大坂の市場的地位低下や、大名貸や近世領主財政を簡単に評価できない。

貨幣の種類と用途に着目したことは、太政官札や藩札・地域通貨の役割について再考を促す成果を得たといえる。そもそも複雑な貨幣の流通は、維新期の日本経済を語るうえで代名詞ともいえる特徴だったので、事実そのものは周知されていた。しかし、それを実証する研究が多かつたとはいえ、著者が明快に各地の事象をまとめたことが大きな意義につながっている。貨幣経済のあり方をとらえることが本書の命題ではあるものの、ここで取引相手や商品の連関性を論じたことで、特産品取引と貨幣体制を相互にみることのできる国産会所方式や、商人たちの慣習、それぞれの地域的特質を改めてみる必然性を有したのである。たとえば、九州北部、信濃国、西播、北関東といった「非領国」地域における貨幣の選良や諸種藩札の流通を詳しく考察したことは、貨幣史や経済史の領域にとどまらず、政治体制や地域行政の枠組みを知るうえでも本書を参考すべきだろうという答えに落ち着く。また、名古屋の事例では、日本全体の経済政策と地域の論理が交錯するなかで、地域経済がどの道を選択するのか、また近世との相違点はどこに起因するのかを教示してくれた。古い表現を借りれば「中央と地方」ということになろうが、その関係をひもとく意味でも重要な分析である。

その他、本書の収穫はたくさんあるが、いくつか雑感を記しておきたい。

第一には、分析対象となる地域の選択である。大坂を起点にしながら、東西に広がる事例の広げ方は大きな議論に結びつけるために適しているように考えられる一方、具体的な成果としてみれば、第三章の高知藩（銭屋佐兵衛家の考察から展開しているので地域の事例に一括できないか）を除けば「非領国」地域を取り上げていることに共通点を見出せる。もちろん「非領国」地域は一樣ではなく、それぞれに個性があることも承知のうえだが、著者はその地域類型にこだわりがあるのだろうか。周知の通り、このような領主の錯綜地域では近世期より種々の通貨が行き交い、人々の「支持（選良）」なくして貨幣流通は成立しなかった。その流れを受けて、対象地域を選択しているのだとすれば目的は明らかである。しかし、かたやで愚問を呈するならば、大名家が一元支配をする「藩領国」であれば、本書の示す地域の貨幣流通と相違するのだろうか。これを考えるひと

つのきっかけは、第三章で紹介される北陸の事例であろう(「北前船」と太政官札)。陸海の別なく、商人たちは列島各地をめぐり、さまざまな商いを展開していた。この海運を用いた商家もそうであるし、街道・宿場を結節点とする取引関係もまた分析対象になるだろう。そのように考えると、「領国」と「非領国」を縦割りで類型化することの意味も問わなくてはならないが、著者が示した通貨利用のありようが領主および行政機構に依拠するかどうか、改めて問い直す必要がある。

第二には右と関連することで、貨幣の選良をおこなう主体について問いたい。制度を設計するのは江戸幕府と明治政府、そして藩や府県といった組織になる。これを体制のなかで運用するのも同様の「権力」側にあるだろう。しかし、最重要の論点は地域の相場を成立させる、貢租上納を担う、または遠隔地との交易をおこなう、といった具体的活動であることは著者も了解されていることである。「発達」という言葉はふさわしくないので割愛するが、たとえば日田の掛屋や、名古屋の有力商家は地域経済を牽引し、領主との関係も強力なものであった。「貨幣を扱う現場」では、彼らの存在や意向は大きかったと推測できるが、それは領主権力との比較ではどうだったのか。体制を作る権力側に対して、有力商家はどのように向き合ったのかという評価について、もう少し踏み込んだ見解を伺いたい。

以上、本書の成果を中心に、雑感を交えながら述べてきた。記念すべき一冊目となる単著は、これから長い道程を歩む著者にとっては通過点となるはずである。地道に史料を分析する、また研究史の精査に注力する、という著者の研究方法に感服しつつ、稿を終えることにする。

